

李 里 花 准 教 授

「民族とは何か」
「なぜ、自分のルーツを明らかに
しなければいけないの?」
という疑問から研究の道へ。
その軌跡と成果を、グローバル時代の
より良い多文化社会の実現につなげる。

在日コリアン2世と、コリアン・アメリカン1世のご両親を持ち、日本とアメリカを行き来しながら育った李先生。日本でもアメリカでも民族的マイノリティとして過ごす中で「李先生は何人?」「Are you Japanese? Korean? Chinese?」と訊かれるたび、答えに困ったという。
「自分がどの民族集団に所属するのはっきりさせないといけないの?」というもやもやした思いは「なぜ人は相手の民族的なバックグラウンドに関心を持つのだろうか?」という疑問へふくらんでいき、それを解消するため、研究の道へ。試行錯誤の末に先生がつかみつつあるものは、グローバル化が進む今を生きる私たちに多くを示してくれる。

抱き続けた疑問への答えを
見出すため、本学部に進学

2019年春に総合政策学部に着任した李先生は、本学部の1期生でもある。約20年ぶりに学部に戻ってきた感想を訊ねると、「私が学生時代を過ごした頃と、ほとんど変わっていません」と瞳を輝かせて答えてくれた。「集まっている学生がみんな情熱をもって学んでいて、活気がある。そして、視線が内向きではなく外に向いていることも、私たちの頃と同じだと思いました」
先生が本学部で学ぶことを決めた

背景には、切実な思いがあった。在日・在米コリアンの両親のもとに生まれ、日本とアメリカで育った先生は、自己紹介をすると「あなたは何人?」と訊かれることが多かった。そしてそのたび、自分は何人だとはつきり答えられないことに歯がゆいものを感じてきたという。興味深いことに、あなたはどこの人かと気軽に問う傾向はアメリカにもあって、国や民族についての考え方に共通するものがあるのだろうか、とも先生は感じていたそう。 「私自身は、日本語を母語として、日本の文化の中で育ったと感じていました。

確かにルーツは朝鮮にありますが、在日コリアンだけではなくコリアン・アメリカンの文化の中でも育ち、自分はどこの国の人だと明確に言い切れない。なぜこういうことが問われるのだろうか、その仕組みを知りたい、と思った時に、いろいろな分野に触れられる総合政策学部ならそういう学びができるのではないかと考えたんです」
スタートしたばかりの総合政策学部には勉強熱心な学生が集っていた。そして意欲ある学生に伝える指導熱心な教員も揃っていた。若き日の先生は恵まれた環境の中、自らが

抱いた問題意識に向き合い、まず「民族」というテーマについてとことん考える学生生活を送る。
4年次には学部の奨学金を得て、アメリカ・サンフランシスコ州立大学に留学。サンフランシスコは公民権運動発祥の地の1つであり、留学先は民族運動の研究で有名なところでもあった。いわば民族運動の本場で学び理解を深めていくうち、先生の中にある感情が生まれる。「民族の問題で悩む人たちにとって生きやすい社会を創造するために、私は何ができるだろうか」

悩める人のヒントとなれば！。

民族の問題で悩む人たちが、どんな考えのもと、どのような日常生活を送っているか、まずその実態を把握したい。こうして先生は、取り組むテーマを「移民」へとシフトしていった。留学から戻り大学を卒業した先生は、働いて大学院への進学費

用を貯めながら、移民やマイノリティに関する研究会に出向いたり、研究者や当事者など多くの人に会ってインタビュを行った。大学院では、移民研究をする上で基礎的な位置付けとなっているアメリカ研究のゼミに入り、社会学を専攻。そして、多文化社会の象徴的な地域であるハワイの、ハワイ大学へ留学した。



李里花 (りりか)

中央大学総合政策学部卒業。一橋大学大学院社会学研究科修士課程・博士課程修了(社会学博士)。多摩美術大学等を経て、2019年より中央大学総合政策学部准教授。専門は歴史社会学、移民研究。著書に『「国がない」ディアスポラの歴史 戦前のハワイにおけるコリア系移民のナショナリズムとアイデンティティ』(かんよう出版)など。

ここで先生は、国に対する帰属意識や移住者と祖国とのつながりといった視点から、近代における移民のアイデンティティについて研究する。特に20世紀ハワイのコリア系移民は、植民地化で祖国がなくなる一方、アメリカ合衆国への帰化も許されず無国籍となった、という歴史を負っていた。どこにも帰属できない人たちの一部は強いナショナリズムに走り、また一部はひたすら悲嘆にくれた。そしてまた、その状況に絶望することなく自分たちなりのアイデンティティを確立しようとした人たちもいた。先行研究や聞き取り調査などでそうしたコリア系移民の人々の葛藤を浮き彫りにしながら、近代社会において、国とは、国籍とは何か、国に所属する／しないとはどういうことなのかを先生は追究していった。そして、国や民族に対する帰属意識は、近代にお

る国民国家(共通の社会生活を営み、共通の言語や文化を持つ共同体を基盤とする国家)の成り立ちと深く関わりながら形成されていった、という見解を持つに至った。移民であれ先住民であれ、人はどこかの国に所属することが当たり前、という風潮がつけられていったのが近代という時代であった。そしてその流れの中で、その国に所属しない人は特殊な存在(マイノリティ)となっていたのだ。

さまざまな人にインタビュを行



「民族の問題について悩んだり、考えたりしている人たちのヒントになれば」という思いを込めて出版された先生のご著書。研究の主なテーマとなったハワイも、近代社会の問題を凝縮したような興味深い場所だった、と先生は振り返る。



ハワイ大学留学中に先生が記事を寄稿した日系新聞。朝鮮半島からハワイへの移民が始まって100年になることを記念した号で、先生はハワイにおけるコリア系移民の歴史を解説した。

先生は2015年にそれ

までの研究の成果を『国がない』ディアスポラの歴史 戦前のハワイにおけるコリア系移民のナショナルリズムとアイデンティティ』という本にまとめて上梓した。これはあえて専門書や学術書という形にしなかった、

と先生は語る。「国や民族と

いうテーマを背景に、自分は何者か、どうやって生きていけばいいのかと考へ続けている人が今でもたくさんいます。そうした人たちに、歴史的にも同じように悩みながら生きていた人たちがいて、こういう風にアイデンティティを確立していったと示したい。そのため、多くの人が手に取りやすい一般書という形で出版しました」

多文化社会の中で 皆が幸せに暮らすために

研究に取り組む先生の熱意の根幹には「新たな考え方を世の中に提示

すること、悩んだり、困っている

人たちの支えになりたい」という気持ちがあることがうかがえる。グローバル化が進む現在は、ダブルやトリプルといった複数のルーツを持つ人も珍しくない。それまである国では移動することなく過ごしていたとしても、仕事の都合などで他の国で暮らすことになる人もいるだろう。また、日本では2019年に入管法(出入国管理及び難民認定法)が改定され、さらに多くの人が他国からやってくることで予想されている。これまで以上に移民が人々ととって身近な存在になり、また自身が移民となる状況も特別なことではない時代になりつつあるのだ。こうした時代の中で求められるのは国や民族の違いを理解しつつ、それを超える価値観だ、と先生は言う。「私がこれまで行ってきた移民研究は、多様な背景を持つ人々がともに生き協働していく社会を実現するために大きな貢献ができる

と信じています」

今、研究がすごく面白い、と先生は笑みを浮かべる。「これまで蓄積してきた専門分野の知識やデータから得た知見を、相手に合わせてわかりやすい言葉で伝えることができるようになってきました。いろいろな人とコミュニケーションを取れるようになって、自分を取り巻く世界がどんどん広がっていると感じています」その言葉通り、先生は今、NGOとの連携やマイノリティをテーマにしたシンポジウムへの参加など、幅広い活動を展開している。「多文化社会の中で多様性を否定せず、皆が幸せに暮らすための新たな考えを確立し



この研究を続けて、移民を知ることはその対岸にいる非移民を知るのだと感じる、と先生。「マイノリティだけでなくマジョリティの世界やその関係性についても深く理解し、物事を多元的に見ることが出来る。それが移民研究の意義の一つだと考えています」

う過程で、多文化社会の実現において力ギとなる「他者理解」についても得るものがあつた、と先生は語る。「聞き取りを行う際、多分、理解してもらえないだろう」という気持ちを相手から感じることが多々ありました。失望する経験を何度も重ねてきたのですね。そうした方々の心を聞き、信頼して話をしてもらえよう、先入観を持たずさらさらな状態で相手に向き合うことを心がけました。聞かせてもらった話は、自分の経験を重ねたりせず、その方のものとして尊重し、受けとめる。それが、互いに理解し合うために大切な姿勢だと考えるようになりました」

たいー」抱き続けてきた願いが実現する時も見えてきた。「つかみつつあるという手応えが、自分の中にあります。けれどそれを主観的なものではなく、客観的で説得力のある形で示すことが大切です。理論とデータを揃え、本という形にして世に送り出したいと考えています」

今後、さらに重要になる 考える力を体得してほしい

先生のゼミのテーマは『人の移動』をめぐる歴史・社会・文化」。移民というテーマを通じて、世の中の動きや人の生活をもっと知りたい、これからのグローバル社会でどう生きればいいのかを考えたい、という学生が集まっているそうだ。2年次では日本がさまざまな国に移民を送り出してきた歴史に注目し、3年次には日本で暮らす移民の人たちの存在を見つめる。生きた学びの中で学生が自らいろいろなことに気づくよう、先生はフィールドワークの機会をな

るべく多く持つように心がけているそうだ。例えば2019年は広島と神戸の日系博物館を訪問して関係者にインタビューを行うほか、ハワイでの調査を実施。実際の出来事や相手の心情に思いをはせ想像力をふくらませる中で、何が大切なことなのかを自分で考え、物事の本質を見極める力の習得につなげたい、と先生は言う。インプットしたらその成果をアウトプットする場も必ず設けるが、そこでは誰もが理解できる論理展開ができていないかを見ているという。「広く社会的な議論を行うためには、客観的で筋の通った

論を展開しなければなりません。そのため必要となる論理的な思考方法と論の組み立て方が身につくよう、指導を行っています」
学びを通じて、「物事を考える力」を体得してほしい、と先生は言う。「インタビューやAIの発達によって、これからは考えなくても処理できることがますます

す増えていくでしょう。また、現代はほんのちよつと自分の意見を主張するだけで思わぬ反発を受けることもあり、つい、「考えない方が楽に生きられるんじゃないか」と思ってしまうがち。けれど、物事の本質を見抜いたり、より良い未来の姿をイメージするのは人間だけができると。そして、状況に流されず自分の人生を主体的に生きていきたいならば、考える力は必須のものです。移民研究はただ1つの正解というものが存在しない世界で、考えて考えて自分なりの答えを見出していかなければ

客観的な視点に基づいて、論理的に自説を展開する。慣れない学生にとって先生の要求はハードルが高く感じられるが、悩んだら気軽に相談できるのが先生のゼミの特徴。ステップを示し一緒にクリアしながら、自然と思考力が伸びるようにサポートしている、とのこと。

ればならない。つまり、考えることについて有意義なトレーニングができる分野だと思います。移民や民族、国といったテーマに関心がある人はもちろん、これからのグローバル時代を生き抜く上で考える力が自分に必要だと思う方には、ぜひこの分野に触れていただきたいですね」

高校生の皆さんへ

私の娘も、子どもの頃の私のように「あなたは何人？」とよく訊かれるそうです。帰宅後、そのたびに娘は私に「私は何人なの？」とたずねます。そこで先日、今後そう訊かれたら「地球人」と答えようと、二人で決めました。日本人も韓国人もアメリカ人も、皆、地球で暮らしている地球人。同じ未来を見つめて生きる同志だと捉える。違いに気づいたら、その背景にあるものに思いをはせながら語り合う。そんな姿勢が、これからの多文化社会の中で充実して生きるためのポイントになるのではないかと思います。

